
ハッピーエンド？

鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーエンド？

【Nコード】

N6418A

【作者名】

鶉

【あらすじ】

小説家である英治と幸せな話が大好きな由季。でも英治が書いた小説に対して由季は……。ほのぼのとした会話をお楽しみ下さい。
《2006・12・15に修正、加筆しました。内容自体は変えておりません。》

（前書き）

この小説で心が温まって頂けたら幸いです。

カタッ……カタカタッ………カタンッ!!

「ふう」

「出来たの？」

キーボードの音が止んだのに気付いたらしく、由季が床を這いながらやってきた。

「ん？ああ」

「じゃあ見せて？」

「いいよ、ホラ」

とりあえずモニターが見れる特等席を由季に明け渡し、俺は煙草に火を着けた。

――10分後――（効果音：鳩時計）

「え〜じ〜」

由季が近付いてきたかと思うと俺から煙草をとりあげ、灰皿に押

し付ける。

ああ、まだ結構残ってたのに……などと思う暇もなく、今まで普通だった俺の両頬は重力に逆らって真横に伸びている。なぜ？それはつねられているから。

「いふあふあふあ（いたたたた）、ふあにふんふあほお（何すんだよ）――！」

「コレ、恋人と別れる話じゃないのよ――！」

「ふあ、ふあへ、ほおひはへふふおひふへ（まっ、まで、とりあえず落ち着け）――！」

やっと頬が元の位置に戻った。鏡の中の俺の頬は少々赤くなっていた。さらに爪を食い込ませてたのでくっきりと小さな弧を描いた痕が頬にぼつぽつと目立っている。

「私がハッピーエンドが好きなの知ってるでしょ――！このバカ――！」

「あたっ、……雑誌を投げるなよ。このストーリーにはなあ、この結末が合ってたんだよ」

「だってこの前は遠距離恋愛の末に別れるし、その前は彼女と死別しちゃうし、その前は……」

「あゝもう、わかったよ――！」

俺は少し強く由季を抱き締める。ちよつとびっくりした顔をしている。

「だったら俺達がその分ハッピーエンドを迎えればいいんだよー!」

「英治…………その台詞はクサイよ」

「…………悪かったな」

「翌日」（効果音：小鳥のさえずり&ニワトリの鳴き声）

「え〜じ〜」

冷蔵庫内にある食料品から何から投げ始める。

「いたたたた、何す『カンッ』…………っっ〜」

俺の額にシーチキンの缶詰がクリーンヒットした。見事なコント
ロールである。

「何で今回は主人公が離婚するのよー!」

「だっ、だからストーリー上どうしても『ゴスッ』…………っっ〜」

空中から南瓜が落下してきた。
ハーフサイズ

「いてて……てか、そんなに嫌いなのか？ だったら読まなきゃいいのに……」

少々痛む頭をさすりながら愚痴る。

「……だつてえ、これは英治の思考でしょ？」

「まあ、俺が書いてるわけだからそうだな」

実際全てが俺の思考ではないのだが、ここで余計なことを言うと今度は何が飛んでくるかわからない。

「そしたら、その……もしかしたら、……私と別れたいのかな……とか……グスッ……」

由季はそのまま床に崩れて、涙をぼろぼろ流している。

（そんなことを思っていたなんてまるで知らなかったな……）
ゆっくりと近付き涙を指先で拭ってやる。

「大丈夫。安心して。俺は由季と別れたいなんて思っていないよ」

「……………ホント？」

「嘘つく必要がないだろ？」

「……………へへッ」

まるでいたずらっ子のようににはかんで俺に抱きつく。ああ、この万華鏡みたいに変わる由季の表情に俺は心底惚れているみたいだ。

『私と彼』

私と彼は付き合って2年が経った。最近彼は仕事が忙しくてなかなか会えない。会うといつも喧嘩ばかりしている。彼はもう私のことが好きじゃなくなったのかな？

実はこの前見てしまった。彼が私より若い女の人と歩いているのを……。

その日一日中私は泣いた、涙が枯れるくらい。ううん、枯れてしまつて涙さえ出なくなつてた。

一週間後、私は24の誕生日を迎えた。その日、彼が『話がある。』と電話を掛けてきた。不安が胸を支配する。

待ち合わせは私と彼がよく来ていた喫茶店。幾つもの思い出が詰まつた場所。『最後の思い出……かな？』私はそう思いながら扉を開けた。中では既に彼が待つていた。

スーッ姿。これからまた仕事なのかな？

席についても沈黙が続く。その沈黙が苦しくて、切なくて、とうとう涙を堪えることが出来なくなつた。私はまだ彼が好きなのだ。

少しうろたえながら、彼は私にハンカチを差し出す。私は涙を拭つているけどいくら拭つても後から後から湧きあがる。ようやく落ち着いた私を見て彼が重い口を開いた。

「結婚……してくれないか？」

私は驚いた。そしてまた涙が止まらなくなつた。涙の色は途端に変わっていた。

「でっ、でも、この前……若い…女の人と……」

彼はキョトンとして、笑い始めた。

「ああ、あれは妹だよ」

「そう……だっただ……」

私は安堵して、胸を撫で下ろした。

「最近忙しくて構ってあげられなかったし、泣かせてばっかだけど、やっぱり俺にはお前しかいないんだ。……返事、聞かせてくれるかな？」

「……………はい」

この喫茶店には彼との思い出が沢山ある。そして今日、また新しい思い出が増えました。そしてこれからも……私の薬指には銀色の輪が光っていた……

F o r y

「ふう」

完成した作品を保存してパソコンを閉じる。こんな短くてありふれた作品だけど、由季は喜んでくれるかな？

気持ちよさそうにスヤスヤと寝息を立てている由季の頭を撫でてやる。

「……ゆう……じい……」

どんな夢を見てるのかな？……決まってるな。幸せな話だろう。
俺も寝ることにしよう……明日も由季と幸せに過ごせる事を夢見
て……

（後書き）

初めての短編……いかがだったでしょうか。ご意見、ご感想、批評などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418a/>

ハッピーエンド？

2010年10月20日16時15分発行